



イン・メモリアム

追悼：河部利夫先生 - 地域研究 (Area Studies) の開拓者

中嶋 嶺雄 (C 昭 35)

公立大学法人国際教養大学理事長・学長

東京外国語大学名誉教授

心の中にいつも残っている存在でありながら、このところご無礼していた河部利夫先生が、本年 (2011 年) 3 月 9 日、療養中の病院で逝去されたことのお知らせをご令嬢の河部裕子様から頂戴した。享年満 94 歳であられたとのことである。謹んでご冥福をお祈りしたい。



私が 1956 年に東京外国語大学の中国科 (6 部 1 類) に入学したころ、河部先生は歴史学・世界史の教授として、精力的に授業に邁進されていた。1955 年にインドネシアのバンドンで開かれた非同盟諸国による第 1 回アジア・アフリカ会議の世界史的インパクトが残っていて、先生も大変共鳴されていただけに、一般教養の歴史学や専修科目の世界史の 1 講義では、勃興するナショナリズムについての情熱的な講義が印象に残っている。E・H・カーの『ナショナリズムの発展 (Nationalism and After)』やハンス・コーンの『民族的使命 (The Idea of Nationalism)』といったナショナリズムについての古典的といっても良い著作を教えてくださいましたのも河部先生であった。私は「階級の論理とナショナリズム」と題した卒論執筆を河部先生のご指導で行うこととなり、今から想えば若気の至りのような論文を先生には丹念に読んでいただいた。

河部先生は、旧制第二高等学校を経て東北帝国大学文学部西洋史学科を卒業後、戦時中に日タイ交換留学生としてタイ国チュラロンコーン大学に留学され、文部省民族研究所の所員として中国の安東 (現在の遼寧省丹東) で終戦を迎えられた。東北帝国大学の西洋史の権威・大類伸教授の門下でありながら、やがて東南アジアをフィールドとするアジア地域研究に向かわれ、最晩年には図們江 (豆満江) など中朝国境地域の開発に期待をつながれたのも、そのような河部先生の若き日の体験が作用していたのかもしれない。

河部先生が本学 (東京外国語大学) に関係されるようになったのは、終戦直後の 1945 年、東京外事専門学校シヤム科助教授としてではなかったかと思われる。1949 年 5 月に新制大学として東京外国語大学がスタートした時点では外国語学部助教授であられたが、やがて外国語学部のリーダー格の教授になられ、1962 年からは教務補導部長ののち、1964 年には初代の学生部長に就任された。やがて全国共同利用研究所としてのアジア・アフリカ言語文化研究所 (AA 研) が 1964 年に東京外国語大学に附置されると、その翌年、河部先生は外国語学部から AA 研に移籍された。AA 研は日本学術会議による発議のかたちをとって開設され、初代所長には世界的な民族学者の岡正雄先生が就任されたが、AA 研設立に到るまでの河部先生のご尽力は並大抵のものではなかったと窺っている。河部先生が 1977 年に本学を退官されて名誉教授になれるまでの間に AA 研の所長に就かれることになかったことは、大変残念であったといえよう。

なぜなら、河部先生は回顧録『歴史の転換を生きて—この五十年』(玉川大学出版部、1995 年) など数多い著作の中での名著『外国学ことはじめ』(同、1989 年) に見られるように、地域研究や外国学 (Foreign Studies) の必要性和重要性をわが国で最初に、そして一貫して主張されてきた学究であられたからである。そのことは Foreign Languages ではなく Foreign Studies の大学として発足した東京外国語大学の論集第一号 (1951 年) に河部先生が「地域学について」と題する力作論稿を寄せられていることによっても明らかである。1992 年に地域研究を目指す大学院博士課程 (前期・後期) が地域文化研究科として新制大学では初めて東京外国語大学に設立できたのも、田中忠治氏 (東京外国語大学名誉教授) や中村平治氏 (同) ら河部門下の先生方の地域研究への熱意があったからであるともいえよう。

なお、河部先生は東京外国語大学退官後、東京国際大学国際学科教授に就任され、同大学の名誉教授としても活躍されていた。